俳句同好会

俳句同好会　　星野　紫杏

相変わらずの多忙のため、句会にご参集下さる方々の調整がつかず、平成2年度の後半の開催も2回に止まると云う結果になりました。

前例に準じ私がまとめ役をお引受け致すことになりましたのでよろしくお願い申し上げます。

（第二十八回）　　於　協会事務所　平成二年八月二十九日

兼題『大文字』『残暑』『花火』『地蔵盆』『西瓜』と季節雑詠

大文字　見かえればまた　舟　鳥居　紫杏
寺陰を　外れて残暑の　石畳　白楊
一休寺　仕込納豆　残暑かな　生雄
らんちうの　泡吹出す　残暑かな　生雄
地鎮祭　祝詞の長き　残暑かな　紫杏
湯上がりの　匂う子手花火　囲みおり　白楊
今はただ　打ち止めだけの　遠花火　陵南
台所に　西瓜大玉　転がせり　景流
槌の音　止んで西瓜の　一休み　四朗
老ばかり　ふえて淋しき　地蔵盆　生雄
源氏名の　紅あざやかに　茶屋団扇　生雄
朝顔の　とぴとぴに咲く　垣根かな　景流
蟬時雨　歩をゆるめつつ　寺に入る　陵南

（第二十九回）　　円山公園「いそべ」　平成二年十一月二日

吟行『知恩院・円山公園とその附近』

大伽藍　東山背に　天高し　景流
照葉して　色添う裾に　衣の音　治吉
二十五の　菩薩の庭に　秋日さす　陵南

兼題『肌寒』『冬支度』『紅葉』『刈田』『鮭』と季節雑詠

肌寒し　タクシー乗場の　長き列　陵南
肌寒し　雨となりたる　書を閉じる　白楊
やゝ寒し　野天のぬるき　長湯かな　生雄
己の影　共に歩みて　肌寒し　陵南
籐椅子を　妻拭き始め　冬支度　白楊
毛布一つ　引き出すことも　冬支度　紫杏
眼鏡越し　妻が針もつ　冬支度　生雄
夫婦松　菰を巻かれて　冬支度　白楊
ソファーの　向きかえ　暖炉開きけり　景流
腰高の　株つらなりし　刈田かな　紫杏
朝見し　稔は夕に　刈田なり　景流
地を掩う　樹々の間に　山紅葉　治吉
黄落や　また雨足の　強くなり　白楊
志野皿の　鮭に蓼添え　酌みにけり　生雄
齢い尽き　旅立つ友や　秋の墓　景流
コスモスの　廃墟の一花を　いとほしむ

俳句同好会参加者

大和電設工業㈱　栩谷　四朗
同和電工㈱　林　治吉
光星電工㈱　久保　白楊
㈱淀電気水道工業所　田中　生雄
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
㈱トーエネック　新谷　景流
㈱トモエ屋　星野　紫杏
京都府電気工事工業組合　三木　一義
元事務局長　吹ノ戸月耕

平2年度

俳句同好会

星野　紫杏

平成三年の新春以来、積年の好景気に支えられ、夫々多忙のため句会の開催も一所に会することが意のままにならず、前期は二回の開催となりましたが、参加各位の力作の内より選ばれたものをまとめて報告申し上げます。

（第三十回）　於：協会事務局　二月二十七日(水)

兼題『年末・年始』に関りあるもの

年賀状　ゆうゆう自適の　友もあり　陵南
残り居し　湯屋も廃業　年の暮　生雄
初篝(かが)り　他社のお礼も　くべにけり　白楊
福茶のむ　和尚の眉雪　声若し　白楊
初暦　大安友引　朱で囲み　陵南

『当季雑詠』

啓蟄(けいちつ)や　地下鉄出口　そっと出る　生雄
身にしみる　遅り寒さと　春の雪　紫杏
母の忌や　墓も染りし　夕茜　生雄
マスクして　目くばせ交す　二人づれ　生雄
停電の　柱上作業に　雪止まず　紫杏
雪しずか　妻と二人の　祝い善　紫杏
寒餅に　梅花そえられ　到来す　紫杏

（第三十一回）『吟行』　清水寺より三寧坂を経て円山公園、同公園にて選句を行う　五月九日(木)

新緑の　樹々重なりて　音羽山　月耕
丹(に)の塔の　水煙若葉を　空に抜く　白楊
芽山椒の　田楽句座に　夕暮るゝ　白楊
桧皮屋根　繕う匠に　緑降る　紫杏

『当季雑詠』

石蕗(つわ)の花　さそわれるごと　友の逝く　治吉
欠伸せる　床几の猫や　花の昼　白楊
墨澱む　如くに蝌蚪(かと)の　生まれたる　生雄

当協会会員の新規ご参加をお待ちしています。
ご連絡は事務局または星野までお願い致します。

俳句同好会参加者

大和電設工業㈱　栩谷　四朗
同　和　電　工　㈱　林　治吉
光　星　電　工　㈱　久保　白楊
㈱淀電気水道工業所　田中　生雄
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
㈱トーエネック　新谷　景流
㈱トモエ屋　星野　紫杏
京都府電気工事工業組合　三木　一義
元　事　務　局　長　吹ノ戸月耕

清水寺にて

高台寺参道

俳句同好会

句会は昨年の後半に比べると開催回数が増加し、吟行を含め四回開催することが出来ました。林会長が吟行の席で満票にて選句される句をお作りになると云うクリンヒットも出ました。十月十日の吟行は、宇治橋東詰に集合して、橋寺・宇治上神社・宇治神社と巡り朝霧橋を経て橘島・塔の島、十三重の石塔を見ながら喜撰橋を渡って平等院鳳凰堂へ、茶舗、日の出園にて少休止の後に茶室対鳳凰庵で全員お茶を頂き、塔の川の鮎宗で瀬音を聞きながら作句投句選句をすると云うすばらしい句会を開くことが出来ました。前例に準じ私がまとめ役と云うことで第三十二回から第三十五回までの皆様の力作をここに収録させて戴きます。

今回は附録として選句後の入選句に対する作者選者のつぶやきも参考として記録報告します。

（第三十二回）　於　協会事務所

平成三年八月二十七日

兼題『七夕』『西瓜』『残暑』『地蔵盆』『大文字』と当季雑詠

七夕に　願い事すら　なく老いぬ　生雄
・サングラス　かけて和尚は　草むしり　陵南
・鉾を引く　紅毛人の　毛脛かな　生雄
言い訳は　扇をとじる　音に断ち　生雄
地蔵会の　供物いただく　老二人　治吉
残暑なお　犬長々と　腹這えり　紫杏
・友の通夜　雲一つなき　天の川　生雄
・大文字　終りて扇子　使いけり　陵南
十人に　みたぬ子供等　地蔵盆　生雄
街路樹の　伸び呆うけたる　残暑かな　白楊
露天風呂　帰りの坂の　天の川　白楊
蔓枯れの　西瓜豚舎に　五つ六つ　生雄

つぶやき・・・

・『サングラス』は頭に被るものでもなく足に履くものでもないので、『かけて』と云うのは余分だな・・・。

・留学生か観光客がまじって祇園祭の鉾を引いている情景で『紅毛人』『毛脛』とある処を『毛脛』の何かを説明して、言外に外国人であることを理解させることが何とか出来ればもっと良いのにね・・・。

・『雲一つなき』『天の川』。晴天である故にすばらしい天の川が見えるので『雲一つなき』は説明の重複ではなかろうか。

・大文字は点火して約三十分近く輝いているのに、その間扇子を使わずに見とれてじっとしているの？　どかんと上がる花火ならまだしも。ちがう、ビルの屋上が満員で扇子も使えなかったんだ。

（第三十三回）　於　協会事務所

平成三年九月二十日

兼題『爽やか』『添水』『月』『秋の虫』『秋の野菜』と季節雑詠

聞きほれて　湯に身を沈め　ちちろ鳴く　月耕
煮南瓜に　紅はじかみも　添えてみよ　白楊
風ゆらす　干瓢軒に　吊るされし　紫杏
かなかなや　早酒とする　留守の宵　白楊
・露座佛の　眼に月光の　さだかなり　景流
小さき秋　見つけし狭庭　日照雨あり　景流
ほろ酔ひて　挙手で別れる　夕月夜　生雄
・空しさは　一夜かぎりの　添水かな　紫杏
篝火の　鬼面は月を　仰ぎけり　白楊
爽やかな　露踏む宿の　下駄素足　白楊
・下り舟　我に向ふや　秋の月　陵南
酔痴れて　蹲の月　揺らし汲む　白楊
花付けて　踏まれるまゝに　秋の草　生雄
みな小ぶり　無人売場の　秋野菜　生雄
コスモスの　乱れて咲けり　母の忌に　月耕
生垣に　零余子点々　雨もよい　景流
・大雨に　跳ねたるまゝの　添水かな　生雄

つぶやき・・・

・月が露座の大佛を照らしていて、それを人が見ているのか、大佛様が御覧になっているのか、一寸わからない・・・。

・一夜妻と枕を交わしているなんて、お安くないね。いやそれは違うのだ。お通夜の晩玄関先に水車や、添水が仕掛られて、葬式が終わるとすべてたたんで片付けてしまうあれなんだ。上の句をはかなきはにしたら・・・。

・川を舟で下って行くその先の上空に月が出ているのであろうが、身構えて月と対決する、或は月と喧嘩をやりそうな感じがする。秋の『秋』は余分だね。

・添水は元来規則正しく『カンコン』と音を立てるものであるが、大雨で芯棒が外れたのか、竹筒に水が落ちてこなくなって止まっている。何とうまく云い当てているね、すばらしいね。

類句習作

ひぐらしを　聞きつ日高し　留守居酒
浜風に　軒の干瓢　ゆらりゆら

（第三十四回）　於　宇治塔の川『鮎宗』
平成三年十月三十日

兼題　『女』『鳥』

・大原女と　同じ道くる　秋時雨　陵南
・鳥づくし　カレンダー残り　一枚に　月耕
　鵯や　赤き実はみな　汝がもの　白楊
　ココココココ　小啄木いるらし　昼の秋　紫杏
　山茶花に　鳥訪う真昼　妻の留守　景流
　絶叫の　貌凍らせて　鵙の贄　白楊
　尼殿に　会釈賜る　秋日和　白楊
・シャンソンの　調べは枯葉　看護生　生雄

『吟行』宇治橋より鳳凰堂まで

　夕霧に　静まり昏れる　喜撰山　景流
・うすら寒む　紅葉に早し　宇治の山　月耕
・とび石に　茶の花こぼれ　にじり口　治吉
　秋風に　地蔵前だれ　色あせぬ　紫杏
・宇治十帖　早蕨の碑や　秋静か　紫杏
　橋寺の　柿たわわにて　日のくるる　陵南
　柿の実の　下に鎮まる　無縁佛　治吉
　木の実敷く　中に沓まれし　ものもあり　紫杏

つぶやき・・・

・京都市内の秋時雨は北の方からやって来る、同じ方向から大原女がやって来る。これはうまく云えているね。近頃本当に大原女の服装をした女性を市内で見なくなったのに・・・。

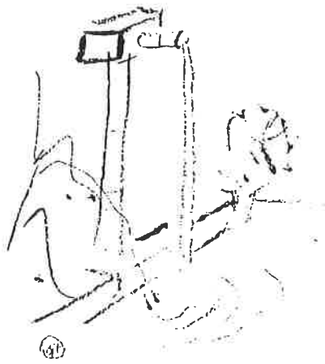
・句はやや川柳風だけど、絵入りのカレンダーは通常二ヶ月が一枚になっていて、残りが一枚と云うことは、十月の終りか十一月の始めのことで、これは新しい季語の創作だね。

・若い看護婦の歌っている鼻唄がイブモンタンの枯葉で、時は晩秋、イブモンタンがつい先頃なくなったなんて、一寸タイミングが良すぎるんじゃない・・・。

・『うすら寒む』であるのに今年はまだ『紅葉』していない、季語ダブリではなく、ありのまゝでうまく時節を伝えている。

・対鳳庵でお茶を戴いて、にじり口からでた飛石のそばに、茶の花が咲いていた。林会長以外の人が全員標を入れた句はこれ。

・『宇治十帖　早蕨』までは源氏物語そのままで、手抜きの句だね。



（第三十五回）　於　協会事務所
平成三年十二月十八日

兼題　『風邪』それに類するもの
　　『冬服』冬の服装とそれに類するもの
　　『師走』年末の風物

・風邪の子の　顔一杯の　マスクかな　月耕
・両の手に　伝うぬくもり　風邪薬湯　紫杏
　嚥して　云いかけしこと　忘れけり　白楊
・咳の子を　母しかと抱き　背をさする　信子
　手を口に　くさめこらえて　会釈せり　生雄
・咳込んで　破るしじまの　一人道　紫杏
・冬服の　身はば余して　退院す　生雄
　冬帽子　ぬいで参道　かけ下る　陵南
・長風呂に　柚子のうつり香　今日終る　紫杏
　束の間の　日向ぼっこや　バス待つ時間　生雄
　賀状書く　禿筆乍ら　字面よし　白楊
・衿を立て　師走の街の　人となる　月耕
・手にぬくし　焼芋くるむ　古新聞　紫杏
・冬ぬくし　土工日向に　昼弁当　景流
　歳時記の　ねんねこ遠き　月日かな　白楊

つぶやき・・・

・子供用の小さいマスク売っていないのかなあ・・・。

・風邪薬湯とは薬風呂のことかな？・・・いや和漢薬の煎じ薬とか売薬の葛根湯を熱くして湯飲みで飲んでいるんだ。・・・

・母親が風邪引きの子をいたわっている様子であるが、『母』『しかと抱く』『背をさする』は一寸くどすぎるのではないか、母子の目が合って、母親が心配そうに、子供が苦しそうにしている処を、もう少しさらりと云えればもっとすばらしい句に・・・

・『道一人』であれば幅のある道を一人で・・・『一人道』と云うと狭い田舎道をしかも一人で・・・と感じるね。・・・

・入院している間に季節が移り、大分痩せてたと云う感じ、退院の喜びと、どこか寂しさがにじみ出ていて実感がある。ご退院お目出度う・・・

・『今日終る』はすべて一日の予定が終ってもう寝るだけと云う、しんみりとした感じ、・・・

・『衿を立て』も季語『師走』も季語であるがこれはこれでよいと思う。・・

・近頃の焼芋は五百円も千円もするのに古新聞なんかで包まないと思うがね、・・・

・『冬ぬくし』『日向』『昼弁当』がやゝくどい感じがする。日向で朝食や夕食はしないし、ぬくいから外で食事が出来るのだから、・・・

十二月会には福知山の堀電気工事（株）の社長婦人から投句を戴きました。友好団体の皆様や当協会会員の新規ご参加をお待ちしています。ご連絡は事務局までどうぞ。

次回開催予定は二月上旬、兼題は『除夜の鐘』『注連かざり』『春近し』『寒椿』『人参』です。出題者

陵南　白楊

俳句同好会参加者

大和電設工業㈱　栩谷　四朗
同　和　電　工　㈱　林　治吉
光　星　電　工　㈱　久保　白楊
㈱淀電機水道工業所　田中　生雄
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
㈱トーエネック　新谷　景流
堀電気工事㈱　堀　信子
㈱トモエ屋　星野　紫杏
洛南電気工業㈱　原田　恕
京都府電気工事工業組合　三木　一義
元事務局長　吹ノ戸月耕

対鳳庵お茶席にて

句座は宇治川畔の鮎宗にて

俳句同好会

星野　紫杏

今年こそ句会開催の回数を増し、一層同好会を盛り上げ、後世に残る様な名句が次々と生れて来ることを念じながら、下手な私が今回もまとめ役をさして戴きました。結果は何卒以下をお読み下さい。

（第三十六回）

平成四年一月二十七日(月)　於　協会事務所

兼題『人参』『寒椿』『除夜の鐘』『注連』『春近し』当季雑詠

義民の碑　寄りそう一輪　寒椿　陵南
鉢植の　梅咲き揃い　初天神　生雄
佗助は　剪らずに置けり　日曜日　白楊
釣人は　身じろぎもせず　春近し　紫杏
寒灯に　迷いし犬の　ちらしあり　生雄
ひらがなの　孫のたよりや　春近し　陵南
注連はずし　軒に背のばす　無聊かな　景流
注連飾り　つばめの古巣に　気をつかい　恕
父母に子に　去られ今年も　注連張らず　紫杏
春近し　隣の孫が　挨拶す　白楊
注連飾り　稲穂のまゝの　稲荷かな　四朗
小鳥来て　注連の稲穂を　ついばめり　陵南
ほゝそめて　乙女あぶなし　寒椿　恕
おみくじを　結ぶ若木に　春近し　四朗
壁白く　椿は赤し　部屋くらし　恕
寒椿　風吹き抜ける　寺の堂　信子
休日の　なき自販機に　注連飾り　生雄
老犬の　番する庭の　寒椿　信子
注連飾り　背負いし篭の　里姿　生雄
唇は　紅人参の　舞姑たち　紫杏
カーブミラ　映りし赤は　寒椿　四朗
人参を　色どりに添え　まぜ御飯　生雄
婚の荷も　揃いて座敷　春近し　陵南
注連飾る　家まばらなる　問屋町

（第三十七回）

平成四年二月二十日(月)　於　協会事務所

兼題『梅見』『初午』『寒明』『山焼き』当季雑詠　当日席題『絵踏』『春寒し』

寒明けて　一重肌着の　さわやかさ　恕
三年たち　庭に移せし　梅咲けり　陵南
沓脱ぎの　緒切れの下駄や　春寒し　白楊
白梅や　淀の城跡　人気なし　陵南
OBの　ボール拾えば　草もゆる　陵南
命得て　踏まれし草も　下萌ゆる　紫杏
毛せんに　梅ひとひらの　暖かさ　恕
春寒や　団栗橋を　肩よせて　四朗
梅林に　白紅数える　孫の声　陵南
葭焼きを　する人不動　背に火焔　紫杏
寒明けの　雑木林は　雨に濡れ　白楊
匂いたつ　古木の梅は　凜として　四朗
梅活けて　苔持つ枝を　剪りかねつ　白楊
幟立つ　ビル屋上の　午祭り　生雄
院内を　試歩の小径に　下萌ゆる　生雄
初午や　露地の裏にも　幕引きて　白楊
天平の　甍うき出し　山焼ける　恕
野火走り　眉を焦がせし　幼き日　白楊
初午や　ごま木に託し　無事祈る　陵南

（第三十八回）

平成四年三月十六日(月)

兼題『卒業』『雛』『彼岸』『陽炎』『若鮎』吟行　洛南南禅寺山門前に集合、疏水水路閣蹴上発電所、金地院を経て　菊水にて句座

陽炎を　追いて峠を　越えにけり　生雄
洋館の　外窓飾る　紙の雛　景流
紙ひいな　テレビとならび　置かれおり　紫杏
彼岸会を　知らす張紙　バス停に　生雄
知らぬ間に　兄と弟　雛飾る　信子
鮎遠く　陽炎もゆる　砂の浜　恕
幼な顔　残して凜々し　卒業生　信子
改札の　今日の華やぎ　卒業子　恕
傘さすも　さゝぬもありて　雨ぬくし　景流
若鮎を　木の芽炊きして　母を待つ　陵南
若鮎の　便を聞いて　水ぬるむ　治吉
菱餅と　ケーキが並ぶ　雛まつり　四朗
すき間より　初燕来て　のぞき見す　生雄

吟行

散策に　春まだ寒し　水路閣　四朗
彼岸まつ　作務僧掃けり　南禅寺　景流
山門の　鳩よけ網に　春の風　陵南
落椿　添水溜に　一つ置く　白楊
春寒に　水路守るや　殉職碑　陵南
お参りの　裳裾みだして　春の風　生雄

春寒し　山門わきの　瀬音かな　紫杏
水清し　あじろにかゝる　落椿　紫杏
これよりは　立入禁止　梅かおる　景流
春寒し　水路に一尾　はぐれ鯉　紫杏

（第三十九回）

平成四年四月二十八日(火)　於　協会事務所

兼題『春の闇』『草餅』『ぶらんこ』『蛤』『葱坊主』

搗きたての　草餅届く　温みかな　信子
陵橋を　渡る酔客　花帰り　紫杏
浜屋台　焼蛤に　誘われし　生雄
逆さまに　束ねて干さる　葱坊主　生雄
大原女の　呼び込む茶店　草の餅　生雄
草餅を　配り始める　同窓会　陵南

選に洩れた句

乗り遅れ　バスを待つ間の　よもぎ餅　陵南
槌音の　一休みして　よもぎ餅　四朗
人けなき　フララコの下　水たまる　信子
なたね梅雨　畳つべたき　素足かな　紫杏

（第四十回）

平成四年五月二十九日(金)　於　協会事務所

兼題『苺』『鯖』『鯉幟』『風薫る』『筍』当季雑詠

淡竹(はちく)の筍(こ)　ニョッキニョッキと　道に出る　景流
声ありて　筍軒に　届きおり　信子
大和路や　連子の窓に　燕来る　景流
海へ向う　大口あけし　鯉のぼり　白楊
茶托をも　替えて夏めく　句会かな　生雄
作務僧に　道ゆずられて　風薫る　景流
闇空を　うねる気配や　鯉幟　白楊
三井寺は　湖の要や　風薫る　白楊

旅先の　一膳めし屋　鯖煮付

選に洩れた句

わが町に　十年ぶりの　鯉幟　陵南
初掘りと　鍬傷荒き　筍を　生雄
パラポラと　ミニ鯉幟　屋上に　紫杏

（第四十一回）

平成四年六月二十六日(金)　於　協会事務所

兼題『河鹿』『枇杷』『草笛』『父の日』当期雑詠

草笛の　きこゆる分校　雨の中　生雄
青嵐と　共に山門　くぐりけり　白楊
山ゆらす　青嵐あり　昼ひざし　紫杏
色つやも　有るやに今日の　青嵐　紫杏
鳴くまじと　飼われし河鹿　みじろぎぬ　白楊
庫裡先の　枇杷よと和尚に　勧めらる　白楊
枇杷熟れて　雨の上りし　保育園　信子
廃屋の　崩るゝまゝに　枇杷熟るゝ　生雄
枇杷を剝く　僧錫杖を　抱えしまゝ　白楊
ようやくに　草笛吹けし　児の笑顔　信子
山寺に　草笛の音や　みどり湧く　四朗
吹ける子と　吹けぬ子ありて　苗の笛　紫杏
父の日は　祖(ちち)父の日ならず　独酒　白楊
父の日と　我は仕えし　憶えなき　白楊
疎(うと)まれし　八十路に近き　父の日や　生雄
夕立に　駈けこむ軒の　迷い犬　生雄

今回は、選者作者のつぶやきを掲載することを止めました。選に洩れたが票が入った句で、反故にするには惜しいと思うものを私の独断で収録しました。

複数の票があって選句はされたものゝ、季語ダブリあり、三段切れあり、作者以外の人には意味のわからない句もありですが、この程度なら誰も出来ると考えて戴き、新人の御参加が増えることを念じながら清記致しました。

参加の方々は次の通りです。

大和電設工業㈱　樹谷　四朗
同和電工㈱　林　治吉
光星電工㈱　久保　白楊
㈱淀電機水道工業所　田中　生雄
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
㈱トーエネック　新谷　景流
堀電気工事㈱　堀　信子
㈱トモエ屋　星野　紫杏
洛南電気工業㈱　原田　恕
元事務局長　吹ノ戸月耕